

て形接続の文における自動詞・他動詞

江 田 すみれ

1 はじめに

自動詞・他動詞は個々の動詞を覚えなければならない項目で、記憶するいい方法があれば、と多くの学習者・教師が悩む問題である。

本稿は通常の授業の文型を教える中に自動詞・他動詞を組み込んで活動できないか、初級の文型を探ってみた結果の報告である。

江田(2014)は「て」による節の結合(以後「て」と省略する)と「と」による節の結合(以後「と」と省略する)を対照し、「と」による節の結合の場合は後項の述語が無意志であること、学習者はそれを無視して文を作るため誤用となることを述べた。本稿は「て」と「と」の問題を自動詞・他動詞の枠組みで考えたものである。

2 先行研究

2-1 自動詞・他動詞

奥津(1967)では

(1) N1 ga N2 o V1

(2) N2 ga V2

の(2)で(1)の主語N1が消え、目的語N2が格助詞をとって主語となり、(1)(2)の意味に同一性が保たれている場合、V1 V2の間に自他の対立があると定義している(p.61)。

寺村(1982)は形態的な対立のある動詞対を相対自動詞・相対他動詞、形態的な対立のない動詞を絶対自動詞・絶対他動詞、「ひらく」のように自他両用で使われるものを両用動詞とし、日本語には相対的な自動詞・他動詞が非常に多く、両用動詞は少ない。英語・中国語はその逆であると述べている(p.305)。

早津(1987)は対応する他動詞を持つ有対自動詞は、(1)非情物を主語とすることが多い、(2)働きかけによってひきおこしうる非情物の変化を表すことが多い、という特徴があると述べている(p.102)。そして早津(1989)は有対他動詞・無対他動詞の性質について、有対他動詞には働きかけの結果の状態に注目する動詞が多く、無対他動詞には働きかけの過程の様態に注目

する動詞が多いとまとめている。

寺村 (1982) は一見形態的に対応しているように見えても意味的に対応していない動詞があり、それらは絶対自動詞・絶対他動詞と見たほうがよいと述べている。例えば以下のような例である。

(3) 誰カガ私ノ腕ヲツカンダ。

× (4) 私ノ腕ガツカマッタ。(例文 3・4 は寺村1982)

中石 (2002、2003、2004、2005、2017 a、2017 b) は有対の自他動詞がどのように習得されるかというテーマで研究を重ねている。

中石 (2003) は第二言語習得研究の先行研究の対象・課題・方法・結果を見やすい一覧表にしているが、小林・直井 (1996)、西隈 (2003)、守屋 (1994) の研究で自動詞が難しいという結果が出されたと指摘している。

中石 (2004) はKYコーパスにおける「つける一つく」「きめる一きまる」「かえる一かわる」をとりあげ、それぞれの語の使用状況を調査した。その結果、①テ形・辞書形・ナイ形いずれの活用形においても自動詞のみを使用している場合、②いずれの活用形においても他動詞のみを使用している場合、③活用形によって使用が固定している場合、④自動詞・他動詞いずれも使用している場合、の4つの使用パターンがあると述べている。

中石 (2005) では文完成タスクを用いて上述の3対の自動詞・他動詞の調査をしている。その結果、自他の正答率を比較すると、他動詞の正答率のほうが高い傾向があるが、「問題によって正答率はばらつきが大きい」(p.28) と述べている。中石 (2005) においても自動詞の正答率のほうが低い結果が出ている。

しかし、中石 (2005: 28) の対のある自動詞・他動詞の使用パターンの図を見ると、他動詞の使用は、「きめる一きまる」では30%、「つける一つく」では20%とやや多いが、3対のどれについても自動詞・他動詞で固定なしが「かえる一かわる」で80%、「きめる一きまる」で60%、「つける一つく」で70%と、大半は固定なしという結果が出されている。

語によって活用形の固定化の傾向がある語が見られる可能性がある語はあるようだが、現場の教育では少し違う方向で、どのように指導すれば自動詞・他動詞が使えるようになるかを検討してはどうかと考えた。

なお、本稿の対象とする自動詞・他動詞は相対自動詞・他動詞に限定せず、出現したもののすべてを対象とする。それは、学習者の使用例から分析を行うため、実際に出現した語を対象とせざるをえないためである。

2-2 初級教科書での自動詞・他動詞

『みんなの日本語』(2013) では、自動詞は、29課、結果状態の文型で「窓が開いています」などの例文で提示される。『初級Ⅱ翻訳・文法解説英語版』(2011) ではVています expresses the state which results as a consequence of the action expressed by the verb と動詞によって引き起こされた結果の状態を示すと述べている。動詞については Verbs which are used with this expression are intransitive verbs, and most of them indicate an instantaneous act or action (p. 26)と、動詞は自動詞であり、その多くは瞬間的な動きや動作であるとしている。

『大地』(2009)では23課と29課で自動詞が扱われている。23課では「と」の文型で「ドアをあけるとふたが開きます」などの例文が提示され、後項では自動詞が使われている。『教師用ガイド』(2009)では「機械の使い方が言える」ことが目標として示されており、「自動詞・他動詞の区別や意味の違いは28課で扱う」と書かれており、23課では特に自動詞と意識させる指導はしないようである。

28課では結果状態の「ている」が「自転車がたおれています」のような文で示され、『教師用ガイド』では目標として「自動詞で状態が描写できる」とあるが、「自動詞に焦点を当てるので、他動詞との対照はしない」(p.40)とあり、自他の区別については教師の勉強にゆだねられている。日本語の教科書は文法を教えることが目的ではなく、日本語が使えるようになることが目的なので、文法に深入りする必要はなく、『大地』のように自動詞に集中すべきであるという注意はもっともなことである。しかし、対のある自動詞が結果に焦点があるということを伝えれば、結果状態の理解が進むと考えることもできるのではないか。

中石(2002)でも紹介されているが、『文化初級日本語Ⅱ』改訂版(2013)(以後『文化』)は自動詞・他動詞について特色のある取り上げ方をしている。

『文化』は25課、26課で自動詞・他動詞を扱っている。25課では絵によって「ドアが開く」「ドアを開ける」「ジュースが出る」「ジュースを出す」などの語を与え、次にやはり絵で場面を示し、話者がどこに重点をおいて述べているかを「人形が動く」「人形を動かす」「水が止まる」「水を止める」などの例で示す。それから本文の会話で自動詞・他動詞を使い、他動詞は働きかけ、自動詞は結果に焦点があることを理解させる工夫をしている(pp.78 - 88)。本文の会話例を下にあげる。

(5)〈会話5〉

マリー：暗いですね。電気をつけましょう。

長井：スイッチはどこですか。

マリー：あ、ありました。

(パチッ)

あれ、つきませんね。

長井：あ、あれじゃありませんか。

(パチッ)

つきました。(下線引用者)

会話例5では動作を他動詞「つける」で、その結果を自動詞「つく」で示している。

その後、文型練習では「～ても＋可能の意味を含む自動詞」「～と＋自動詞」の練習をしており、初級の教科書でありながら可能の意味を含む自動詞まで取り上げている点が他の教科書より進んでいる。

続いて26課では結果状態の「自動詞＋ている」の形を教えるという構成になっている。

初級の教科書には特色があり工夫されているものもあるが、文法には軽く触れる方針の教科書もあり、そのような、文法に踏み込まない教科書を使った場合は、自動詞・他動詞は対のある自他動詞について一度学んだあとは、巻末の自他動詞のリストで各自勉強してくださいという形になる可能性があるのではないか。

本稿は授業の中で自動詞・他動詞、特に学習者にとって難しいとされる自動詞を認識させる項目について考えたい。

3 調査方法

「て」による節の結合を取り上げる。

李在鎬他『日本語学習者作文コーパス』を用い、形態素「て」で検索し、不要なデータを除いた。

採用しなかったものは日本語記述文法研究会（2010）の「て」の用法で以下のように挙げられているものである（pp.280 - 287）。

複合述語を作るもの

アスペクト的な述語形式	ている	てくる	てしまう	である
意志・意図を表す形式	てみる	てみせる	ておく	
授受動詞と結びついた場合	てやる	てくれる	てもらう	
その他	てほしい	てほしが	る	

て節

並列	(6) 男たちは狩りをして、女たちは木の実を集めた。
対比	(7) 弟は結婚していて、妹はまだ独身です。
前触れ	(8) 問題が一つあって、父は英語が話せないのである。
逆接	(9) 本当のことを知っていて、教えてくれなかったらしい。
順接条件	(10) 歩いて20分かかる。
付帯状況	(11) 立っておしゃべりしていた。

（例文（6）－（11）は日本語記述文法研究会2010より）

並列・対比・前触れ・付帯状況の用法は下の例のように自動詞・他動詞のどちらも使うことができ、自動詞あるいは他動詞に偏った関係を持たない用法と考えたためである。

並列	(12) 窓を開け、光を入れて風も入れる。
	(13) 光が入って風も入る。
対比	(14) 光を入れて風は入れない。
	(15) ガラス窓を閉めれば、光は入って風は入らない。
前触れ	(16) 一言で言って、それはワンマンな彼が決めたことだ。
	(17) 一言で言って、それは最初から決まっていたことだ。
付帯状況	(18) テレビをつけて居眠りをする。
	(19) 立っておしゃべりしていた。

誤用が見られたものは以下の用法である。

継起	(20) 新宿へ行って、映画を見た。
原因理由	(21) 悲しい話を聞いて、涙がこぼれ落ちた。

（例文（20）（21）は日本語記述文法研究会2010より）

4 調査結果

形態素「て」で検索したところ、3203例を得た。それから目視で複合述語および並列・対比・前触れ・付帯状況の例を削除し、828例の例文を得た。そのうち、節の結合の点で誤用と判断した例は193例であった。今回の誤用の判断は節と節の結合関係に絞った判断であり、助詞などについては評価していない。コーパス上に誤用と表記してある例でも、助詞や活用などが取り上げられて判定されているものは今回の誤用の対象に含めなかった。

表1は誤用の原因によって分類したものである。複数の要因が関係している場合はどちらについてもカウントしている。そのため、合計の数は193以上になる。

「他の表現」とは「と・ば・が」など、他の表現で節を結合するほうが適当と考えられる例である。

- (22) ちょっと難しくて照れくさいの気がして、
言われば言うほど、会話はすらすらになっ
ていると考える。(CG048中級) (照れくさ
いと感じるが、話せば話すほど会話がすら
すらになる)

上の例は「て」ではなく「が」が適当と思われる。このように、節の関係を考えずにどのような関係の節でも「て」で接続できると考えていると思われる誤用が多い。

「自他関係」とは誤用に自動詞・他動詞が関わっていると思われる例である。「と・ば」が適当と考えられて自他動詞が関わっているような例は他の表現でも自他関係でも数えてある。

- (23) ドラマやバラエティ番組がある。それらを
見て、いろいろ勉強になる。(CG042上級)
(それらを見ると、いろいろ勉強になる) (後
項の動詞が自動詞なので「て」で結合しに
くい)

「語の選択」とは、下の例のように、語の選択の間違いである。

- (24) 主人公の口調を従って話して、会話の能力も上がる。(CG081中級) (まねて話すと)

語の選択の中には自他動詞の間違いは含めていない。(24) のような例は「口調を従って」は「語の選択」で数えており、その中の「話して」は「話すと」と、「と」の誤用としても数えている。

「原因理由」は原因理由と読めるが「て」ではおかしい例である。

- (25) 直接読める資料で、空間を占めないでとても便利だと思われます。(CG131中級)
(場所をとらないので)

表1 「て」による接続の誤用

誤用	数
他の表現	78
自他関係	69
語の選択	19
原因理由	20
節のつなぎすぎ	4
その他	16

表2 「て」による接続の節の代替案

候補	数
と・ば	38
ても	10
が	2
し	4
たら	3
たり	3
時	3
名詞修飾	4
ようになる	11

上の例は「ので」のほうが適当と思われる。6節でこれについて述べる。

そして節のつなぎすぎの問題も大きな問題である。

表2は「他の表現」としたものが実際にどのような誤用が見られたか、候補と思われる節で示した。

「て」ではなく「と・ば」が適当と思われる例がかなり多い。「他の表現」の半数である。

以下に、節のつなぎすぎの問題、他の表現との混同の問題、特に「と・ば」の問題、原因理由の問題をとりあげよう。

5 学習者の誤用

5-1 論理が明確でないもの

自動詞・他動詞の話題に入る前に「て」による接続の基本的な誤用について触れておこう。「て」による接続の意味の問題と節の結合しすぎの問題である。

「て」による接続には意味があり、「て」では結合できない節がある。しかし、学習者はこのことをあまり理解していないように見える。他の表現としてまとめた例の多くがこれにあたる。

(26) 私は日本語を習うことのはじめ、放課後に復習しない。毎日新しい単語と文法を習って、覚えられないことをますます積み重ねて多くなった。(CG078中級) (新しい単語と文法を習ったが、覚えられず、それが積み重なって多くなった。)

(27) 卒業してから、必ずべらべらと話せると思いきや、三年生になってまだいろいろな問題があります。(CG050中級) (三年生になっても)

学習者は、論理構造はあまり気にせず、「て」ならばどのような節でも結合できると考えているかのように見える文を作っている。「て」による接続については従来から「「テ形・連用形」は特定の意味を表すために用いられるというより複数の事態を結びつけて一つの文にまとめるというのがその働き(日本語記述文法研究会2010:281)」のように、「て」それ自体に特定の意味があるというわけではない、という議論がなされている。しかし、「て」はどんな節でも結合できるのではなく、一定の意味があり、前項後項の述語にも制限がある。上の例の(26)や(27)のように、学習者がすでに知っているはずの「が」や「ても」は使えるようにできるといいと考える。

5-2 節の結合しすぎ

「て」で接続できる節の結合については、1文に節を入れすぎないように、という指導が必要であらう。

(28) そうして一回日本に行くと、日本語がもっとうまくなりたいたから勉強をする気が出きて、もっといっしょけんめい勉強すれば、漢字スランブを脱して日本語がもっとうまくなると思う。(KG053中級)

(29) 最初は私が好きな歌手について知りたかったしいろいろと情報を調べる途中にその歌手が進行するバラエティー番組を見ることになって、歌も聞かなくなるとなって自然に日本語を知っていくところともっと詳しく習えば今度日本に行って嵐にあ

うことになった時彼らとの会話ができるのではないかというもしかしたらバカみたいな想像をしながら日本語の勉強をして資格賞もとるうちに日本留学も考えるようになった。(KG063上級)

(28) はその一部分で文を作り、次の文を接続詞で結合すれば許容できる文になるだろう。

(30) 一回日本に行ってくると、日本語がもっとうまくなりたいと思うようになって、もっといっしょけんめい勉強するだろう。そうすれば、漢字スラングを脱して日本語がもっとうまくなると思う。

(29) もいくつかの文に切ることによって許容度は増す。

(31) 最初は私は好きな歌手について知りたかった。そこで、いろいろと情報を調べるうちに、その歌手が進行するバラエティー番組を見るようになって、歌も聞くようになった。自然に日本語を知っていくと、もっと詳しく習えば今度日本に行って嵐にあうことになった時、彼らと会話ができるのではないかというもしかしたらバカみたいな想像をするようになった。このように日本語の勉強をするうちに日本留学も考えるようになった。

1文に節は3つまでにし、文を区切り、必要なところに接続詞を使うように、などと指導することによって「て」による接続の文の許容度は高くできるであろう。

5-3 「と」に読めるもの

誤用例のうち、「と」で節を結合すれば問題がないと読める例が16例見つかった。

(32) インターネットで、たくさんの日系ドラマやバラエティ番組がある。それらを見て、いろいろ勉強になる。(CG042上級) (見ると、勉強になる)

(33) 主人公の口調を従って話して、会話の能力も上がる。(CG081中級)
(口調をまねて話すと能力が上がる)

(34) インタネット(注)でGoogleのようなウェブサイトを使って、検索の結果は時々たくさん全然不関連のウェブサイトを含めています。(CG127中級) (使うと関係のないサイトが現れる)

学習者は「て」で節を結合しているが、これらの文は「て」では誤用となり、「と」にすれば適当な文になる。

5-4 「ば」に読めるもの

「ば」に読めるものとした例は21例あった。うち12例はコーパスの誤用判定で「ば」という代替案が書かれている例であった。

(35) そういうことはただインターネットを使ってすぐ分ります。(CG126中級)
(使えば／使うとすぐわかります)

(36) その国の文字を勉強しなければならぬと思います。その国の文字を分かっていて話すこともできるから、基本的なのが重要だと思います。(KG004初級) (わかっていれば話すこともできる)

(37) インターネットでe-mailを使って、数分間私の仕事が終わります。(CG126中級) (使

えば／使うと仕事がすぐ終わります)

コーパスの編集者が代替案として「ば」を提示しているため、本稿もそれに倣った例が多いが、(35) (37) は「と」に置き換えることも可能であろう。上の例は「ば」にすれば言いたいことの意味は通じると感じられる。これらの文は仮定を含んでいない一般条件文（日本語記述文法研究会2008）である。

5-5 原因理由

原因理由と読めて誤用と判定した例は以下のような20例である。

(38) 合宿をしながら日本語を勉強するプログラムがあって参加することにした。

(KG046上級) (あったので)

(39) インターネットがこんなに自由にだれでも使えて、将来の世界で、新聞や雑誌は
いらないと見通す。(CG135中級) (使えるので)

以下に、これらの誤用に対して自動詞・他動詞の問題として考えることができるかどうか、検討していく。

6 分析と考察

6-1 「と」の文についての考察

誤用例について、なぜ「と」と判断したか、先行研究から読み取ることにする。

仁田（1995）はて形接続の文の意味を〈時間的継起〉〈起因的継起〉などという用語を使って説明している⁽¹⁾。これらを本稿では継起・原因理由としている。順に見ていこう。

〈時間的継起〉

〈時間的継起〉はC 1 シテC 2の形で表すことができ、二つの節が時間的に先後関係にあるものである。〈時間的継起〉の節は典型的にはC 1 C 2共に意志動詞を用い、主体は同一である。仁田（1995）は無意志動詞が使われる例は少ないと述べている。

(40) 彼女は～きゅうにまじめになって、「～」という。

シテ節が人間の意志で制御できない事態を表す場合は原因・理由に解釈される。〈起因的継起〉である。

(41) 妙にいらいらして、眠れないから～

また、異主体による時間的継起を表す例もあるが、その場合は主体が非情物であるとしている。

(42) このとき、エレベーターが停止して、ドアが開いた。

そして、契機という〈時間的継起〉と〈起因的継起〉の中間の用法もあるとしている。契機は前項が知覚・認識を表現し、後項で情報・現象が述べられ、何らかの事態を認識したことがきっかけになり、現象が起こるあるいはある事柄を認識するという形の文であると述べている。

(43) かれが、父親のはなしをきいて、戦国の世の有為転変のはげしさに多少の感慨をもよおしたのだろう。(例文 (40) - (43) 仁田1995より)

この文では前項の述語は心的状態の変化が用いられ、後項では無意志的な表現が用いられるとされている。

主体が非情物の文、契機の文などもあるが、それ以外の〈時間的継起〉は、基本的には前項後項の動詞は意志動詞として問題がないであろう。この制限にあたらない文が誤用と判定されることになるのである。

日本語記述文法研究会（2008）は「と」は一般条件、反復条件、事実条件を表すとしている。

（44）春になると花が咲く。（一般条件）

（45）私は酒を飲むと、おしゃべりになる。（反復条件）

（46）蛇口をひねると水が出た。（事実条件）

一般条件は「従属節の事態が成立した場合に必ず主節の事態が成立する」（p.106）ことを表し、従属節のことが起こると主節の事態も必ず起こるという法則的な関係がある。この関係の事態が繰り返し成立することを表すのが反復条件文である（p.107）。また、過去に1回の事態が成立したことを意味する条件文を事実条件文としている。それは「同じ主体の動作の連続を表す場合」で、この場合「テ形ではほぼ同じ意味を表すこともできる」（p.108）と述べている。

（47）台所に入って、冷蔵庫を開けると、ビールを取り出した。

（48）台所に入ると、冷蔵庫を開けて、ビールを取り出した。

（（44） - （48）日本語記述文法研究会2008）

事実条件にはこのほかに「きっかけ」「従属節の動作をきっかけにしておこる発見」「従属節が動作の継続状態、主節がその最中に起こった事柄」もある。

一般条件文は従属節の事態が成立した場合に必ず主節の事態が成立することを述べるのに対し、事実条件の連続動作は「テ形ではほぼ同じ意味を表す」と述べられるように、仁田（1995）の時間的継起の用法と重なるものであろう。一般条件文の主節は事態の成立、つまり無意志的な結果を表すのに対し、事実条件文の連続動作の文は主節も従属節も動作・作用が表現されるという点でこの二種類の文は性質が異なる。

今回の「て」による接続の誤用例は上の一般条件の形式の文である。

（32）インターネットで、たくさんの日系ドラマやバラエティ番組がある。それらを見て、いろいろ勉強になる。（CG042上級）（見ると、勉強になる）

（33）主人公の口調を従って話して、会話の能力も上がる。（CG081中級）
（口調をまねて話すと能力が上がる）

（34）インターネットでGoogleのようなウェブサイトを使って、検索の結果は時々たくさん全然不関連のウェブサイトを含めています。（CG127中級）（使うと関係のないサイトが現れる）（（32） - （34）再掲）

そして（32）から（34）はどれも後項の述語が自動詞である。

仁田（1995）が指摘するように、「て」による接続の継起は動作・作用を表す動詞が用いられる。上の例のように無意志の自動詞を用いた場合は、日本語母語話者は自動的に継起ではないと感じ、一般的な条件を表現する「と」の文であると判断するのであろう。

今回出現した「と」に読める文、「ば」に読める文の後項の動詞を調べてみた。

表3 「と」に読める文、「ば」に読める文の後項の動詞

	文の数	語および数
「と」に読める文の後項の動詞	16	なる10 可能1 感じがする2 あがる 含まれる 入る
「ば」に読める文の後項の動詞	21	なる8 可能8 上達する3 役に立つ 終わる

「と」「ば」共に「なる」が多い。可能表現が使われること、相対自動詞が多いこと、多様な語は使われず使用する語の範囲が狭いこと、が特色としてあげられる。「と」と「ば」の違いは、「ば」のほうが、可能表現がよく使われることである。無対自動詞の「感じがする」「上達する」も見られた。

無対の自動詞には「遊ぶ・働く・走る」などのような意志動詞もある。しかし、自動詞であっても、意志動詞であれば、そうした動詞を使った節を「て」節で結合した場合、我々は誤用とは感じない。後項に対のある自動詞を使った場合は「て」ではなく「と」で接続したほうが誤用と読まれないと学習者に伝えることも可能であろう。

学習者は述べたい内容をもとに節を結合する場合もあるが、5 - 1、5 - 2で見てきたように内容をあまり考慮せず、漠然と節を結合する例も見られる。5 - 2では逆接の「が」を使うべきところで「て」を使うなどの例さえ見られている。学習者が節相互の意味的な関係をあまり考えず節を結合するような場合、教室では、形の面から、他動詞を使った節を複数結合する場合は「て」、二つの節を結合し、後項に自動詞を使う場合は「と」と指導することも可能なのではないか。自動詞・他動詞が頭に入っていれば、形の上では理解しやすい可能性がある。相互に関係があるということは、例えば前田（2009）の「「と」は「条件と言うよりも時間的な先行を表す接続辞であることをうかがわせる（p.57）。」という表現からも認められる。

金沢（2003）は「と」は条件表現として分類するより継起表現として分類し、「て」との対比を学習者に示すべき（p.15）と述べ、「と」と「て」の節の主語、述語について以下のようにまとめている。

前項後項における主体 「て」 同主語 「と」 異主語が可能

後項における述語 「なる」「ある」「見える」などの自動詞・形容詞類

本稿も金沢（2003）の主張に賛同する。つまり、日本語教科書では「て」は継起、「と」は必然的な結果であると扱ってきたが、両者の差は実は絶対的なものではなく、「と」は継起表現であり、後項に他動詞を使う場合は「て」、自動詞を使う場合は「と」を使うと説明することも可能なのではないか。

（32）それらを見て、いろいろ勉強になる。（見ると、勉強になる）

学習者は「それらを見て学ぶことができる」「それらを見ることはいい勉強だ」と言いたいのであろう。「見る」ことが「勉強になる」ことの契機になっているのだが、上の文は誤用文である。それは主節が自動詞だからである。自動詞を使う場合は「と」で二つの節を結合すると正しい文になると指導してみてもどうだろう。

「て」の継起の用法では、主節従属節の主体が同一であり、二つの節は意志的な複数の動作・作用を表すものが適当である。後項の動詞に「なる」や「可能表現」を用いた場合は、「て」ではなく、「と」あるいは「ば」で表現する。「て」を用いると不適格な文になる。「と」を用いた

場合は必然的な結果と読める文になる。

「と」の文の教育をし、「と」が定着したころ、「て」と「と」の文を比較して学習者にみせてはどうであろう。

(49) 部屋に入って電気をつける。(他動詞)

(50) 部屋に入ると電気がつく。(自動詞)

同様の事態が主節に使われる動詞が自動詞であるか他動詞であるかによって「て」と「と」を要求するということを認識してもらうといいのではないだろうか。

そして、中級で継起の「と」つまり事実条件文の「と」を教育し、「と」は前項と後項の主語が異なる場合でも許容されることを指導することも提案したい。「と」の継起の用法でを学ぶことにより、吉田(1994) 金沢(2003)が指摘する学習者の誤用を減らすことができるであろう。

6-2 原因理由についての考察

「て」の誤用例の中で原因理由と読める例は以下のようなものである。

(51) まだいつくかの理由があって、下のほうに述べよう。(CG135中級)(あるので)

(52) この世の中に、いろいろなメッセージがあって、あなたにとって必要のを選んで使う。それがいいだ。(CG104中級)(あるから、必要な情報を選んで使うことが大切だ)

(51) のように後項に意志表現を用いた例、(52) のように評価を表している例は「て」では表現しにくいことがわかる。森田(1989)は「て」の原因・理由の意味は、前項が成立した結果、話し手の意志とは関わりなく後項の事態がやむを得ず成立する場合に成立するとしている。(p.755) 仁田(1995)は〈起因的变化〉はシテ節・主節のどちらかが無意志動詞でなければならないと述べている(p.111)。また、シテ節には心的作用・受動形の動詞が目立つとしている。そして、制御不能な事態が述べられている場合は起因的継起と読めるが、制御可能な事態は時間的継起と判断されるとしている。(51)(52) のような例が不適当なのは話者の意志や判断を述べており、「やむを得ず成立する」という条件にあてはまらないためである。

また、仁田(1995)は二つの節の時間的な関係については、C1がC2の後に生じる場合は、ノデは可能だが、シテは不可能であるとして以下の例を出している。

(53) 明日友人が訪ねて来るので、部屋を掃除した。

×(54) 明日友人が訪ねて来て、部屋を掃除した。((53)(54) 仁田1995)

仁田(1995)では前項が後項の後に生じる場合は「て」で表現できないと述べられていたが、今回の調査で、前後の関係を含め、前項・後項の間にテンスの違いがある場合は原因・理由の「て」は使いにくいことがわかった。

(55) インターネットがこんなに自由にだれでも使えて、将来の世界で、新聞や雑誌はいらないと見通す。(CG135中級)

(56) 幸い、いま中日の交流がしげしげになって、それを機会としてできるだけ日本人につきあいとしたほうがいい。(CG050中級)

(55)(56)は前項で現在のことを、後項で将来のことを述べている。このように前項と後項の間に時間的な差がある場合は「て」では表現しにくい。これは「て」は基本が継起であることに

よるのであろう。

(57) 外国語をよく話すと、その言語の感覚を覚えてきて、自分の自信を増やせる。

(CG033中級) (その感覚を身につけられて)

(57) の例は無意志表現の文なので「て」で表現できる。

しかし、以上見てきたように、原因理由の文は実は「て」ではかなり制限があり、「ので」「から」を使った方が間違いなく言いたいことが表現できそうである。原因理由の文では無意志表現が用いられることから、自動詞を使うことを奨励できるかと思い、例文を見てきたが、意志・無意志の問題、評価の表現が使えない問題、テンスの問題があり、原因理由の「て」は少々使いにくい形であることがわかった。吉田1994も「て」より「ので」「から」を使うほうが安全と述べている。自動詞の教育のために原因理由の「て」を使うのはかなり無理がある。原因理由の「て」はそれ自体の持つ性質を教育したほうが効果があがるであろう。

7 まとめと今後の課題

初級の授業で取り上げる項目の中に、自動詞・他動詞、特に自動詞の使い方を意識させる活動は入れられないか、という問題意識で「て」による節の結合を見てきた。

その結果、いくつかのことが分かった。

- ・「て」はどんな関係の節でも結合できるのではなく、制限と意味がある。「て」による節の結合は、継起・付帯状況・原因理由と意識させるべきである。
- ・「て」の継起の文は同一主体の複数の動作・作用によって表現される。つまり、多くの場合、他動詞が用いられる。
- ・「と」の必然的な結果の用法では後項に自動詞が用いられる。
- ・後項の動詞が自動詞または可能表現の場合、「て」ではなく、「と」あるいは「ば」を用いたほうが正しい文として読み取れる。
- ・「と」を学んだあとで「て」と「と」を対比させる。

(49) 部屋に入って電気をつける。(他動詞)

(50) 部屋に入ると電気がつく。(自動詞) (再掲)

- ・原因理由は「て」より「ので」「から」を使うほうが間違いが少ない可能性がある。

今回は「て」形を例にとったが、ほかの文型でも自動詞・他動詞を意識させることができるものがあるだろう。

今回学習者の例文を検討して、学習者の語彙の幅が広くないことに気が付いた。学習者はよく使ういくつかの語を使いまわして文を作っている可能性がある。そこから一つ仮説を立てられる。

中石 (2017b) が自動詞・他動詞を教える場合の条件として①自動詞・他動詞の概念を知っていること、②自動詞・他動詞を語として学習者が知っていること、③どちらが自動詞でどちらが他動詞かを知っていること、が前提になると述べている。自動詞・他動詞は文法の問題であると同時に語彙の問題でもあるということである。この考え方をういて教育ができないだろうか。一定の文脈を前提に何組かの自他動詞を整理して提示し、それからタスクをさせる、という活動を

何回か繰り返してはどうだろうか。自他動詞一般ではなく、当該の数組の語を記憶する、それを繰り返すことにより自他動詞の概念と語の両者を学ばせる取り組みは効果があるだろうか。調べてみたい。

注

- (1) 仁田 (1995) はテ形接続の意味を 3 種 4 類に分類している。それは〈付帯状況〉〈継起〉〈並列〉であり、そのうちの〈継起〉を〈時間的継起〉と〈起因的継起〉に下位分類するという考え方である。

参考文献

- 奥津敬一郎 (1967) 「自動化・他動化および両極化転用」 須賀一好 早津恵美子編『動詞の自他』ひつじ書房
- 金沢裕之 (2003) 「日本語教育における「～と」接続文の位置付けについて」『日本學報』韓国日本學會
- 寺村秀夫 (1982) 『日本語のシンタクスと意味 I』くろしお出版
- 江田すみれ (2013) 『「ている」「ていた」「ていない」のアスペクト』くろしお出版
- 江田すみれ (2014) 「「て」による節の結合と「と」による節の結合の異同について—継起・必然的な結果・発見・時の用法—」『日本女子大学 紀要 文学部』64
- 中石ゆうこ (2002) 「有対自動詞と有対他動詞の用法とその指導について—初級教科書の分析の結果から—」『広島大学大学院教育学研究科紀要』第二部第51号 385-392
- 中石ゆうこ (2003) 「対のある自動詞・他動詞の習得研究の動向と今後の課題」『広島大学大学院教育学研究科紀要』第二部第52号 167-174
- 中石ゆうこ (2005) 「対のある自動詞・他動詞の第二言語習得研究—「つく—つける」「きまる—きめる」「かわる—かえる」の使用状況をもとに—」『日本語教育』124号 23-32
- 中石ゆうこ (2017a) 「対のある自動詞・他動詞を絵カードで指導する時の問題点—英語を母語とする日本語学習者への動詞産出調査の結果から—」3-11
- 中石ゆうこ (2017b) 「日本語の自動詞・他動詞習得ルートとそれに適した指導方法」日本女子大学学術交流・日本女子大学大学院文学研究科主催／日本語文法項目データベース『はごろも』研究会共催公開シンポジウム『日本語の自動詞・他動詞を考える』
- 仁田義雄 (1995) 「シテ形接続をめぐる」『複文の研究』くろしお出版
- 日本語記述文法研究会 (2010) 『現代日本語文法』①第1部総論第2部形態論 くろしお出版
- 日本語記述文法研究会 (2008) 『現代日本語文法』⑥第11部複文 くろしお出版
- 早津恵美子 (1987) 「対応する他動詞のある自動詞の意味的・統語的特徴」『言語学研究』6 79-109 京都大学言語学研究会
- 早津恵美子 (1989) 「有対他動詞と無対他動詞の違いについて—意味的な特徴を中心に—」須賀一好早津恵美子編集『動詞の自他』ひつじ書房
- 前田直子 (2009) 『日本語の複文 条件文と原因・理由文の記述的研究』くろしお出版
- 森田良行 (1989) 『基礎日本語辞典』角川書店
- 吉田妙子 (1994) 「台湾人学習者における「て」形接続の誤用例分析—「原因・理由」の用法の誤用を焦点として—」『日本語教育』84号 92-103

資料

- 李在鎬 日本語学習者作文コーパス <http://sakubun.jpn.org>
- 『文化初級日本語Ⅱ』改訂版 (2013)
- 『みんなの日本語 初級Ⅱ』(2013)

『みんなの日本語 初級Ⅱ 翻訳・文法解説英語版』（2011）

山崎佳子ほか（2009）『大地 ②』スリーエーネットワーク

山崎佳子ほか（2009）『大地 教師用ガイド②』スリーエーネットワーク